



続・全日本マスターズ。 記念シンポジウムが大好評

2018年1月。本誌の表紙は2月号だが、暦の上では松の内が過ぎたばかり。旧年秋の第38回全日本マスターズ選手権大会(10/27～29、和歌山・紀三井寺公園陸上競技場)の紹介を続け、“おせち料理”とした。なお、同大会での女子最高齢は89歳の辻ミツエさん(奈良)と小西弥津子さん(大阪)。共にW80クラスの種目に出場し、辻さんは走幅跳1m62(-0.5)、砲丸投(2kg)4m19でいずれも1位。小西さんは砲丸投3m63で2位となった。

“かつての顔”W70・100mで対決 渡川さん、渥美さんで好レース

雨中の激戦、好レースだった。W70クラスの100mだ。競い合ったのは渡川孝子さん(74歳・徳島)と渥美裕子さん(74歳・滋賀)。ご両人は京都光華短大の出身。学年では渥美さんが1学年先輩で、渡川さんが後輩となる。

レースはブラジルのキヨコ・マツシマさん(74歳)が棄権し、6人が号砲を合図に一齐にゴールを目指した。前半から渡川さんと渥美さんがリードして、両者が主導権を争う。60m切りまでは肩を並べる接戦。後半は渡川さんのストライドが伸び、徐々にリードしてフィニッシュ。タイムは追い風1.6mで16秒39。渥美さんは16秒52だった。

3位の渡辺由紀子さん(70歳・栃木)が17秒81だから、いかに先頭の2人が速かったか。渡川さんは「先輩に勝って申し訳ないけど、優勝はうれしい。走幅跳を棄権して、100mに懸けたかがありました」と笑顔で。

一方の渥美さんは「雨と寒さで参りました。でも条件はみんな同じだから、言い訳は許されない。負けは負けだから」の後「やはり勝ったかった」と少し残念そう。最終日の10月29日は悪天候で中止になり、楽しみにしていた60mがおじゃんに。「60mならスタートが得意なので勝てたのに」と渥美さん。

60mについては渡川さんも「私も

100mと同じように懸けていたのに。10秒を切る自信はあったし、9秒80の日本記録の更新も狙えたかも」と話す。

このお二人、11月号で紹介したとおり、渥美さんは旧姓・塩尻。光華学園高(京都)時代にアジア東京大会に1年生で出場、200m3位になったスプリンター。夏のインターハイも100m12秒3(+2.3)で1年生Vを飾っている。渡川さんの旧姓は林。短大時代の1962年に400m59秒5の日本女性初の1分切りをし、同年の日本選手権400mの覇者でもある。

100mの和歌山大会はかつての注目選手の対決だったわけだが、次回の鳥取シリーズについて、渥美さんは「1年先のことを言うと笑われるかもしれませんが、60mとは言いませぬけど、光華短大OGで上位独占を！」の意気で臨みます。渡川さんと私のほか、中塚(旧姓・満月)百合子という“隠し玉”もいますから」と、1年先宣言を。

北の大地の女性たち活躍 北海道から数々入賞

北の大地からはせ参じた北海道の女性軍団の活躍は目覚ましかった。

W75クラスの戸部啓子さん(78歳)は800m4分21秒42、3000m18分13秒88で2種目を制覇。400mは2分01秒93で2位となったが、まずは健闘だ。800mといえば石崎千恵子さん(60歳)がW60クラスで3分16秒91の1位。3000mは14分21秒

06で2位だったがタイトルを取れた。

W65・80mHは高橋理恵子さん(66歳)が16秒93(-0.8)のタイムで昨年に続く連勝を遂げた。クラスが上がってW80の鈴木郁子さん(80歳)は400m1分49秒07の大会新、800m4分13秒06で、こちらもダブルタイトルを取り、傘寿の記念とした。

同じW80クラスの投てきでは兎玉澄子さん(82歳)が砲丸投(2kg)7m60、ハンマー投(同)21m07で16m73の大会記録を4年ぶりに更新し、2種目に勝った。ただ円盤投(0.75kg)は13m26の2位にとどまったが、メダル3個をゲットして気を吐いた。

跳躍の立五段跳で国兼慶さん(24歳)は11m67を跳び、W24クラスのトップ。

100mはエントリーが多く、W40は15人、W50は20人、W65が16人と予選を勝ち抜き、決勝進出を目指さなくてはならず、なかなかの激戦だった。

まずW40の石川千里さん(42歳)は14秒38(-0.3)で3位に食い込み表彰台へ。W50の中野久美さん(53歳)は18秒68(-1.4)の5位。挑戦した円盤投(1kg)では13m20の7位に入賞。W65の

北海道から参加したW75の戸部啓子さん(78歳)は800m4分21秒42、3000m18分13秒88で2種目を制覇





10月26日に開催されたシンポジウム。君原健二氏(左)、室伏重信氏(中)、増田明美氏(下)らがパネラーとなり、大いに盛り上がった



貝守久美子さん(69歳)は不利な年齢にもかかわらず、100mで16秒77(+1.0)の3位、200mは35秒72(-0.7)の4位。ほかに走高跳では1m05で2位と一番いい順位を。

宿田恵子さん(50歳)はW50クラスの走高跳、走幅跳、砲丸投に挑み、1m08で4位、2m94(+1.1)の6位、6m82(3kg)で8位と優勝こそなかったが、いずれも入賞に結び付けた。

最終日が中止にならなければ、さらに北の大地の女性軍の活躍度は上がっていただろう。

60歳から始め優勝の中村さん 渡邊さん“100歳の重み”

岩手・盛岡市から8時間かけて和歌山入りした中村和代さん(65歳)がW65クラスの100m、200mでトップ。初日の200mでは7人のライバルたちと争い、32秒96(-0.7)で2位以下を引き離れた。第2日の100mは地元和歌山の加藤恵子さん(65歳)と競り合ったが、15秒36(+1.4)で加藤さんの15秒53を抑えた。「時間をかけて来て、結果を出せて良かったです。200mは今年、32秒93で走っていますので、追い風でしたら、もう少しタイムが縮まったかもしれません」と破顔一笑。

マスターズ陸上は60歳から始めて、今年6年目。「(陸上は)1人で都合のいいときに練習できるし、楽しいです」と礼賛、やる気を見せた。

日本マスターズ陸上競技連合の名誉副会長・渡邊源太郎さん(大阪)は100歳を迎え、ますます意気盛ん。レ

ースではM100・60m、砲丸投、円盤投の3種目にエントリーし、砲丸投(3kg)2m73、円盤投(1kg)5m58を投げ、競い合う相手のないまま2つの金メダルを手にした。

最終日の60mは中止となり「走りたかったのに、残念やった」と一言。競技だけでなく、長年にわたってマスターズ陸上に尽くした、として開会式で特別感謝状が贈られた。

渡邊さんは名誉副会長を務める前は副会長の肩書で役目を果たしてきた。しかも選手としても常にトップクラスとして活躍。役員と現役選手の1人2役の渡邊さんは「100歳の重み」の存在感を示した。

親子共演となった息子の和生さん(70歳・大阪)はM70・200m(+0.6)29秒86で4位、1走を務めた4×100mRは1分00秒95の3位でメダルを獲得した。が、「(親父を)追い掛けているけど、なかなか追いつけない」と和生さん。共演はこれからも続く。

記念シンポジウム 「生涯スポーツの果たす役割」

大会に先立ち開催記念シンポジウムが開幕前日の10月26日、和歌山市内のホテルで開かれた。およそ250人の参加者を前に、パネラーの男子マラソン銀メダリストの君原健二さん、アジアの鉄人・男子ハンマー投の室伏重信さんとマスターズ連合会長の鴻池清司さんと、ロサンゼルス五輪・女子マラソン代表の増田明美さんがコーディネーターを務め、会場は盛り上がった。

君原さんは、東京五輪で絶大な期待をかけられながら8位に終わったことで、その後は1年間ほど競技から遠のいていた。が、人生のパートナーとの出会いが(1968年の)メキシコ五輪の活力(銀メダル)につながったという。その間のつらかったこと、それを乗り越えた喜びは本人しか分からないとも。

室伏さんは日大生の頃のスランプの苦しさを話し、常に競技スポーツは勝つことが大切。その勝つためにはと、自身の記録を伸ばすことに心血を注いだ。心と体に刺激を与えること、継続することの大切さも語った。

さらに君原さんは「32歳で第一線を退いてからは健康を求めて、家の周りを散歩したり、体を動かすことが爽やかな気分をつくる」と語り、現役時代に優勝した経験のあるボストンマラソンに50年後、再挑戦をするに当たって、好きな酒を断って頑張った逸話まで。

室伏さんの話の中には「70歳を過ぎて息子(広治)や娘(由佳)の試合のときは、自分自身のこと以上にプレッシャーを感じた」と父親の愛情を示す一コマも。

鴻池さんはマスターズ五輪の実現を強く訴えるとともに「日本人も欧米人のように気軽にスポーツを楽しんでほしい。日本人は堅すぎる。人生を明るく生きるため、もっと身近に、こだわることなく、スポーツと親しんでほしい。そのきっかけづくりがマスターズ陸上」と熱っぽく語りかけた。

増田さんは聴衆にユーモアを交え、親しみやすい口調で語りかけた。会場からの笑いを誘い大受けだった。自身のことではロス五輪でメダルどころか、完走できなかった悔しさを切実に話した。「ロス五輪の数週間前から走れなくなり、所属していた会社の社行会に出る資格なし、とすっぱかした」。本番のマラソンは「16kmで足が止まってしまった。その瞬間『ロス五輪から解放された』の気持ちになった」といい、帰国した際、飛行場で「非国民」の罵声を浴びたそうだ。

それから「3カ月間、会社の寮から一歩も出ていないほど、ショックは大きかった。死ぬことも考えた」そうで、「それを切り抜けたのは、多くの励ましの手紙のおかげ。今も感謝しています」と当時を振り返った。

最後は質疑応答で幕を閉じた。